

## イントロダクション



## P4E (Philosophy for Everyone) への道

梶谷 真司

### 序論の序論

「哲学」というと、かつては訳が分からない、変人がやることというイメージが強く、「哲学をやっています」と言っても、喜ばれることなどほとんどなかった。相手に困惑か反感を呼び起こすのが関の山だった。もっともそれは、不当な反応でも無理解でもない。実際哲学は訳が分からない、変人がやることだった。違いは、「だからいい」と思うか、「だからダメだ」と思うかだ。

ところが近年、「哲学」と言うとなぜかウケがいい。もちろん相変わらずの反応もある。それでも、ごく普通の人たち——とりわけ女性や高齢者——で関心をもつ人が多いように感じる。また教育関係者の間でも、求められることが増えている。何が変わったのだろうか。いろんな要因はあるだろうが、哲学そのものの顕著な変化について言えば、学問や研究の一分野としての哲学とは違う、哲学カフェ、哲学教育など、社会のなかで実践的に行われるものが一気に広がってきたことだろう。それらは「哲学プラクティス」と総称され、いずれも「対話」を軸にしていることに特徴があり、この UTCP のプロジェクト「Philosophy for Everyone (哲学をすべての人に)」もその一つであると言える。

この3年間の活動のおかげで、私はすっかりその筋の人間だと思われている。しかしそれ以前、少なくとも UTCP に関わるまでは、自分がこんな世界に足を踏み入れるとは、私自身が予想しなかっただろう。実を言うと、もともと私は、いわゆる「哲学教育」に直接携わってきたわけではないし、哲学カフェはまだに行っていないのだ。そういう意味では、P4E のプロジェクトを開始した当初、私はキャリアも実績もない「素人」だった。そんな私がなぜ今こんなことをしているのか、その背景を語るのは、「すべての人に」に向けた哲学のプロジェクトの意義を説明することにもなるだろう。私もしょせんこの「すべての人」の一人にすぎないからだ。そこで「P4E (Philosophy for Everyone) への道」と題して、このプロジェクトとこの冊子へのイントロダクションとしたい。

### 就職活動支援

ここに至る道程を振り返ると、私の出発点となったのは、かつて働いていた私立の T 大学で学生の就活用の書類作成を手伝ったことである。その大学の学生

たちは、就活が初めてというだけでなく、もともと文章を書き慣れているわけではないため、とにかく書類が書けない。世にあふれているマニュアルに助けを求め、一生懸命それに合わせた結果、ぎこちない滑稽な書類になっていた。彼らにとって、エントリーシートや自己PRは、おそらく生まれて初めて真剣に書く文章であり、したがって大変な努力を要するものだっただろう。というわけで、一つ書くと、ほとんど同じものをあちこちの会社に送っていた。

私も研究者、大学の教員なので、いわゆる就活はしたことがないが、これではダメだということくらいは分かる。希望する就職先がいろいろなのに、同じ文面の書類を出すのは、相手かまわず同じラブレターを送るようなものだ。失礼というものもあるが、そもそも勝ち目がない。受け取った方としては、何で自分に送ってきたのか、自分のことをどう思っているのか、送り主と自分の相性はどうか、すべて分からない。「男なら（女なら）誰でもいいんです！ 付き合ってください！」と言われて、いったい誰がそんな人と付き合う気になるだろうか？

ここで学生たちを非常識、世間知らず、マニュアルがないと何もできない、などと言って嘆いたり笑ったりするのは簡単である。けれども、私を含めて、いわゆる就職氷河期以前の間人は、今普通にイメージされる就職活動なるものを、実は知らないのである。当時はまだ厳然たる学歴社会で、出身大学によって行ける会社のランクはだいたい決まっていた。職種は選んだが、ランクを巡って熾烈な争いをする必要はなかった。だから、履歴書と簡単な志望理由書が書ければよかった。今のようなエントリーシートでいろんな質問に答えたり、自己分析に基づく自己PRなどは、していなかったはずである。

当時は、少々（どころかかなり）非常識で世間知らずであってもかまわなかった。入社してから数カ月かけて社内研修があり、性根を叩き直される。そこで最低限「社会人」と言える人間になればいい。ところが今は、そんな研修をじっくりやれる会社は少ない。入った時点で使い物になる人材が求められる。今の若者が「ゆとり教育」その他の理由で、知識面、能力面で前の世代よりも下がっているところがあるのは確かだろう。だが彼らは昔と違って、社会人として生まれ変わる機会も与えられずに、いきなり裸で放り出される。その最初のステップが就職活動である。まともにできなくても仕方ない。そして身近には、きちんと指導できる人がいない。当たり前だ。大学教員も親もやったことがないからである。そこでマニュアルが登場するのだ。断言してもいいが、今の年配の人たちが学生時代に、今と同じ状況に置かれたら、やはりまともな就職活動はできなかっただろうし、多くの学生がマニュアルを必要としただろう。

それだけではない。そもそも相手をきちんと意識して文章を書くというのは、そう簡単なことではない。相手かまわず同じスタイルで文章を書いたり話をする

のは、会社の人間にも、研究者にも山ほどいる。そういう人にとって、実際には自分とは異なる他者というのは存在しない。他者との関係で自分がどういう存在であるかが決まってくることも分からない。いろんな会社と同じ書類を送る今の学生と何ら変わりはないのである。

私に就活の書類を見てほしいと言って学生が来た時、それはたんに目の前の学生に力を貸してあげるというレベルのことではなかった。もっと重大な課題を突きつけられていたのである。

### 自分と向き合い、自分の言葉を獲得する

学生がもってきた書類——エントリーシートや自己PR——を見て感じたのは、表現を直すとか、構成を変えるとか、内容的に書き加えるという「添削」ではどうにもならない、根本的にやり直さなければならないということだった。だが、実際、彼らをどうやって指導すればよいのか。どうすれば彼らは、ちゃんとした書類が書けるようになるのか。

私がかもってもらいたい作文、模範的な書類を作ってあげるのは、ある意味では簡単なことだ。けれどもそんなものは、書類審査に通っても、面接でかならずバレる。会社というのはそんな甘いところではないはずだ。それどころか面接官は人を審査するプロである。大学教員の入れ知恵などすぐ見抜かれる。大事なのは、学生に嘘をつかせないこと。彼らが面接で多少の誇張はあっても、偽りではなく本当に自分のこととして話せるようにしなければならない。そのために、彼らの中にあるものを明確にして、それに言葉を与え、彼ら自身が自分で語るための言葉を見つけられるようにしなければならない——そう考えた。

そこで私の指導は、とにかく質問、質問、質問になった。なぜこの業種なのか、なぜこの会社なのか、そこで何がしたいのか、何ができるのか、あなたの長所は何か、短所は何か、それが仕事とどう関わるのか……そのためには会社のことを理解し、自分自身と正面から向き合わなければならない。これが世に「自己分析」と呼ぶものなのだろうが、これを徹底的にやる。そうすると、一つの会社のための書類を作るだけで1週間かかる。学生は半泣きになる。そういう中で、私は彼らにふさわしい言葉を見つけ、それを軸に書類を書かせる。もちろん文章はあとで整えてそれなりの文章にするが、上手すぎないほうがリアルでいい場合もあるだろう。だがいずれにせよ中身、ネタは、あくまで彼らが自ら絞り出さなければならない。

これは彼らにとってかなりつらい作業だったようだが、この苦しみを通して、彼らは自分で自分のことをしっかりアピールできるようになっていく。そして自分に自信をもつようになる。それまでは、面接まで行っても、感触があったのか

どうかも分からず、不安なまま帰ってきて、「自分なんかダメだ」と落ち込んでいた。しかし書類がしっかり書けるになると、「今日のグループディスカッションでは、上から3人には入れた」とか、「これでダメなら、あの会社には行かなくていい」と言い切るまでになっていく。そして実際、内定を取ってくる。

これは私にとっても、非常にいい経験になった。人間は、自分を語る言葉を手に入れることで、変わることができる、人生を変えることができるのだ。それを私は、学生たちから教えてもらった。しかもこれは、自分と自分の人生に向き合い、問い、答えるという、ある意味きわめて哲学的な営みだった。おそらく私の哲学対話は、このとき始まっていたのだ。

## 漠然とした確信

就活の書類づくりの手伝いという、限られた学生との経験を積み重ねていたころ、もっと大きな、大学全体に関わるものが起きていた。当時、全国の大学では、「初年次教育」なるものが導入され、その内容について議論されていた。初年次教育の趣旨は、大きく分けて3つある。1つ目は、高校から大学での学生生活への移行をスムーズにすること、2つ目はレポートの書き方のようなアカデミック・リテラシーを身につけさせること、そして3つ目が大学卒業後の就職への意識を高めること、である。

こうした流れに対応して、T大学でも、それに該当する科目名を「文章表現演習」から「ライフデザイン演習」に変えた。個人的にはこの新しい名称は、けっこういいと思っていた。趣旨をよく表している。大学生活から就職、さらにはその後の人生まで視野に入っている感じがする。しかし、ほとんどの教員の間でこの新しい科目名への変更は——容易に想像しうることだが——大いに不評を買った（どんな変化であれ、変化は変化だという理由だけで反対されるものだ）。反発、嘲笑、困惑を引き起こし、「無意味だ」「中身が分からない」「アリバイ作りにすぎない」という、いかにもありがちな言葉があちこちから聞こえてきた。「どうすればいいんだ？」と途方に暮れるのは、むしろ率直で誠実な反応だろう。

そもそも教員の中には、会社に働いたことがなく、したがって就職活動をしたことがない人が多い（私もそうだ）。つまり、普通の意味では社会人ではない（社会人とは会社人のことだ）。そういう人間に就活に役立つことを教えろというほうが無茶である。そこで困った教員は、何とかそれらしいこと、例えばSPIの問題演習のような、一種の試験対策をする。本人自身、勉強と言えば受験勉強しか思い浮かばないのだろう。あまりに芸はないが、これはまだいいほうだ。多くの教員は、何事もなかったかのようにこの変化を無視して、従来通りレポートの書き方や、それ以前のステップとして、新聞記事の要約をさせたりしていた。結

局はそれが社会に出た時にも役に立つんだ、という論理で正当化しながら。

しかし私には、名前の良し悪しはともかく、「初年次教育」なり「ライフデザイン」は、理念としては非常に大事なものを提示しているように思えた。上で述べたように、1つ目の趣旨は、大学生生活へのオリエンテーション的なことなのだが、これはやってあげれば親切という程度のことだ。重要なのは2つ目と3つ目であるが、問題は、レポートや論文の書き方と、就活の準備と書類づくりの折り合いをどうやってつけるかである。

これら二つのことは、一般には別のことだと考えられている（もちろんいずれも「社会人」として必要なこと、という説明はされる）。一方が、章立ての仕方や、文献の調べ方、注の作り方、事実と意見の区別など、他方は、企業研究や履歴書の書き方、マナーや一般常識など、という具合に、かなり違っている。大学教員にとっては、前者のアカデミック・リテラシーのほうが慣れているので、こちらに逃げたくなる気持ちは分かる。だが、ここで挙げたようなことはすべてテクニカルなことで、表面的なことにすぎない。根本においては、この二つは共通しているはずだ——私にはそういう“漠然とした確信”のような感覚があった。しかし当時はまだ、それをどのように関連づければいいのか分からなかった。

それでもいろいろ試行錯誤して教える傍ら、何かいい参考文献がないか探していて、一冊の本に出会った。山田ズーニーという風変わりな名前の女性が書いた『伝わる・揺さぶる！ 文章を書く』（PHP 選書）である。

### 考えること、書くこと、自由になること

山田ズーニーさんの『伝わる・揺さぶる！ 文章を書く』（PHP 選書）という本は、新書版の小冊子である。この本との出会いは衝撃的だった。そこには私が探していたことがほとんどすべて詰まっていたと言っている。

目次からしてすごい。目につく章や節にはこんなものがある——プロローグ「考えないという傷」、自分の立場を発見する、自分の頭でものを考える自由、考える方法が分かれば文章は書ける、機能する文章、他者の感覚を知る、根本思想（自分の根っこの想いに忠実か）……一瞬哲学書かと見まがうタイトル。そう、考えないということは傷を負っていくことなのだ。考えることによって、人は立ち直り、立ち上がり、自由を手にする。根底にあるのは「考える方法」であり、それが「書く方法」、さらには「語る方法」につながる。しかもそこで重要なのは、書いたものが実際に「機能」すること、言い換えれば、意図したこと、達成すべき目標をきちんと実現することであり、そのために自分への忠実さと他者への配慮が求められる。そこに大学の勉強で必要なものと就職で必要なものとの区別はない。生きるために必要なものだけがある。

これだけ「壮大」な話になると、抽象的で大雑把な文章論だと思うかもしれないが、この本がさらにすごいのは、徹底して実用的な点だ。後半の実践編で取り上げられるのは、「上司を説得する」「お願いの文章を書く」「議事録を書く」「志望理由を書く」「お詫びをする」「メールを書く」というシチュエーションである。別の本、『考えるシート』（講談社）の章・節のタイトルは「相手とつながる」——お詫び、お願い、感謝、励まし、「自分とつながる」——自己紹介、自分を社会にデビューさせるための企画書、自分の悩みをはっきりさせる、「他者・外・社会とつながる」——志望理由書、レポート、小論文、会議を仕切る、みんなの前で話す、となっている。

ここから分かるように、「書く」ということで山田さんが想定しているのは、大学のレポートや就活の書類のみならず、誰もが出くわす日常生活の様々な場面である。しかもそこには、シンプルかつ具体的なマニュアルがある。それは目的に応じて「問い」と「答え」を積み重ねることで「考え」を広げ、深め、形にすること、そのプロセスを明示化したものである。山田さんはもともと通信教育の会社で小論文を担当していた経歴をもつ。彼女の卓越したマニュアル作りの能力はそこで培われたのだろう。

「マニュアル」と言うと、安直な小手先の技術の紹介みたいに聞こえるかもしれない。実際マニュアルなるものは、多くの場合そうだろう。しかし、世の中には必要不可欠とさえ言える、頼るべきマニュアルがあるということを、私は初めて知った。そこには、文章を書くための思考の根本原理とそれに基づく着実なステップが明瞭に示されている。そしてそれに従うと、文章を書くのに、ある意味でより多くの時間と労力をかけることになるにちがいない。私たちは普段、十分考えないままに安易に文章を書きすぎている。それにブレーキをかけ、まず考えるように仕向ける。問いと答えを積み重ねる。それはかえって苦しみを増すことになるかもしれない。かつて私が就活の相談に来た学生にそうさせたように。けれどもそのことで、文章は確実によくなり、生き生きしたものになる。

この本に出会うことで、レポート・論文の書き方と就活用書類の書き方が基本的には同じものだという私の「漠然とした確信」は、明確な形をとった。そればかりではない。書くことは、結局、問うこと、考えることであり、要するに広い意味での——そして根本的な意味での——哲学と同義なのだ。そして「考える方法」を身につけることができれば、私たちは実際に自分自身の自由を手に入れることもできる。このことを理解して以来、私にとって教えること、学ぶことは、すべてこの意味での哲学となった。今にして思えば、それは Philosophy for Everyone への大きな一歩であった。



## 問わないこと、考えないこと

考えることにとって問うことは、決定的な意味をもっている。考えるためには問わねばならず、適切に明確に考えるためには、適切に明確に問わねばならない。どのような問いを立てるかが、どのように考えるかを定める。とりとめもないことしか考えられないのは、問いにとりとめがないからである。考えが抽象的なところだけで動いているのは、問いが抽象的なままだからである。そして、問がないということは、要するに、考えていないということなのだ。

ところが、大学で授業をしていて気になるのは、学生たちが質問をしないことである。T大学にいたころ、講義やゼミをしていても、質問はほとんど出なかった。当初、それはあまり気にしていなかった。私の話を聞いて、よく分かったということだろう（学生にはよく分からない授業が多い中、分かるというだけで十分いい授業じゃないか！）と思っていた。しかし講義が終わった後に来たある学生の一言で、私は自分の考えがおめでたい自己満足にすぎないことを痛感した。その学生は次のように言ったのである——「先生、授業中に質問ってしていいんですか？」

私は授業中、切りのいいところで「ここまではいいですか？何か質問はありませんか？」と聞いていた。にもかかわらず、この学生は、質問していいのかどうか自信がもてなかったのである。逆に言えば、この子は、授業中に質問するものではないと思っていたのだろう。私は少なからずショックだった。この学生がどういう経験をしてきたのかは分からないが、一般的に言って、学校では授業中の質問はあまり歓迎されない。とくに“学力”があまり高くない子は、質問しても先生から「そんなことも分からないのか」「話を聞いてなかったのか」と怒られかねない。たしかに理解の遅い生徒の質問は、授業の進行の妨げになることも多いだろう。だから一概に学校の先生を責める気はない。しかし子どもたちは、そうした経験を自分でしたり、他の人がそういう扱いを受けるのを目にして、やがて問うことを封じ込められ禁じられていく。そして自ら問わなくなる。

では東大に来ているような、いわゆる“優秀な”学生はどのようなのか。よく質問するのではないかと思うかもしれない。たしかにT大学よりは質問する学生はいる。質問のレベルも高い（成績評価やテストに関することも多いけど）。だがやはり少ない。「何かありませんか」と念を押して聞いても、「大丈夫です」という答えが戻ってくる。だがこの、ずっと長い間、私自身気にとめていなかった言葉に、いつのころからか急に強烈な違和感を覚えるようになった。

いったい何が「大丈夫」なのか。彼らは質問がない状態をいいと思っている。それもそのはず。大学入試を最終目標とする中学高校においては、テストで「正

解」を出すことに最高の価値が置かれる。そのためには、習ったことをすべて吸収し、分からないこと、したがって質問することが何もない状態が理想である。東大生というのは、その理念をもっともよく実現した人たちなのだ。だから「優等生」である彼らは、疑問があろうがなかろうが、「質問がないのがよい」という規範に従い、まさしく質問はせずに「大丈夫です」と言う。そう、問題の根っこは同じなのだ。成績の良し悪しにかかわらず、質問・疑問がないようにする——これが学校教育の目標なのである。

このような態度は大学に入っても続く。もちろん大学では、「もっと疑問をもつように」と言われ、質問するよう推奨される。しかし簡単には変わらない。とくに東大生は、「エライね」「スゴイね」と褒められることに慣れている、あるいはそれを目指そうとする。それが彼らのアイデンティティなのだ。だからレベルの高い質問をしなければならないというプレッシャーが常にある。マヌケな質問をするくらいなら黙っているほうがいい。そして「大丈夫です」と言う。実際、東大で低レベルの質問をすれば、教員から嘲笑されるか、呆れられるかもしれない。それに対してT大学の学生には、「いい質問をしよう」というプレッシャーは少ない。でも、レベルの低い質問をすれば、やはりバカにされる。結局、日本の大学では、成績が良かろうが悪かろうが、「大丈夫です」という答えが正解であり、安全なのだ。根っこは同じなのである。そしてこの問わない、考えないという傾向は、大学どころか、会社に入っても、退職しても、死ぬまで変わらない。

しかし、本当は、「大丈夫」なんかでは全然ない。問がないというのは、考えていないということだ。ただ外から受け取って、自分の中で消化しているか、消化不良を起こしているか、そのいずれかだ。それは、要するに、受験勉強の延長でしかない。問うとはどういうことか、まずはそれを学ばなければならない。そしてさしあたりは、低レベルのマヌケな質問から始めればよいのだ。そうやって、自分を問うことに慣らしていく。そこからしか、思考は育っていかないのである。

## 学ぶことのない書く方法と考える方法

私はT大学で、問いの立て方を意識的に明確化し、それをゼミのレポートや論文、就活の書類の作成に活用し、そうした実践を通して問いの立て方をいろいろと工夫していった。そうやって指導すると、学生の力は、程度の差こそあれ、意外なほどよく、しかも確実に伸びることが分かった。学力があまり高くないでも、文章を書き慣れていなくても、ちゃんと書けるようになる。もちろんいわゆる文章のうまさは変わらない。教養ある文章が書けるようになるわけでもない。けれども、論旨が明瞭で、筋道だった、“いい”文章を書くようになる。そし

て、就活でも内定をとってくるようになる。

そんなことをしているうちに、ふとしたことから東大で教えることになった。諸事情から、ゼミ形式の授業は担当しないため、学生たちにじっくり文章の書き方を教える機会はなくなった。講義形式の授業で、学期末にレポートを提出させることにして、T大学でやっていたレポートの書き方の概略だけは伝えた。しかし出てきたレポートの多くは「書けて」いなかった。もちろん東大生は、文章は書き慣れているから、とりあえず字数は稼ぐ。勉強もするから知識もあるし、言葉もよく知っている。そういうところはT大の学生とはたしかに違う。でも、「書けて」はいない。テーマやポイントがはっきりしない、論旨が一貫していない、ということは似ている。しかも、量だけは書くので、自分が実は書けていないということに、おそらく気づいていない。

そう、やはり根は同じだ。しっかりとした問いがない、だから思考もあやふやなまま、ただ流れ、それが文章として積み重なるだけになる。これは、レポートや論文を書くための高度な学問的訓練がなされていないという問題ではない。東大生も考える方法を知らないのだ。だから書けないのである。意外に思うかもしれないが、たぶんこの点では、大学のレベルによって程度の差はあっても、本質的な違いはない。根底にあるのは、授業中に質問がないのと同じなのである。

これで日本の大学でレポートや論文の書き方がほとんど教えられていない理由が分かる。そういう名目の授業があったとしても、それは、文献の調べ方、引用の仕方、注の付け方など、レポートや論文を書くために必要な特別な技術の伝達である。こういうものは、たしかに学術的なものの“体裁”としては重要だし、そうした形式的なものが、いわゆる“形式的”で瑣末でどうでもいいと言うつもりはない。個人的には、何にせよ「形式」というのは、一般に思われている以上に重要だと思っている。けれどもそれはどこまでも、レポートや論文の書き方でしかない。それ以前の「書く」ということそのものの方法を教えることにはならない。そして「書く方法」とは、やはり「考える方法」からしか出てこない。しかしこのようなあまりにも一般的な技法を、いったい誰が、どこで教えるのだろうか。小中高から大学に至る教育システムの中に、それを位置づける場所は、不思議なほどないのである。

## UTCP から IPO、そして哲学サマーキャンプへ

さて、思考の方法を教えるというのは、やがて自分自身にとっても、哲学そのものになっていった。「問いとは何か」「考えるとはどういうことか」「いかにして問いや考えは哲学的になるのか」「何のための哲学なのか」——これが具体的な形で哲学教育に結びつく場となったのが、UTCP であった。

もとはと言えば、私は UTCP と何の関係もなかった。哲学教育に関しては、上で述べたように、ある程度は出会うべくして出会ったところがあるが、UTCP は本当に何の必然性もない。2012 年、翌年から新たに設置される現代思想コースの同僚として中島隆博さんと知り合い、彼から夏にハワイ大学とコラボで英語の哲学セミナーをやらないかと誘われ、安請け合いしたせいで、ズブズブと UTCP にはまり込み、抜けられなくなってしまった。折しも、国からの資金で 10 年間続いた COE プログラムが終わり、その後の存続をどうするか模索していた時、上廣倫理財団が支援して下さることになった。財団が国際哲学オリンピック (International Philosophy Olympiad : IPO) 関連の事業を全面的にバックアップしている関係で、UTCP もそこに協力することになった。その任を引き受けたのが私である。これが直接のきっかけとなって、UTCP の活動として哲学教育に取り組むことになった。

IPO というのは、1993 年に始まった高校生の哲学エッセイコンテストである (詳しくは UTCP の私のブログ「邂逅の記録」(2) ~ (7) を参照)。日本も 2001 年の第 9 回大会から参加している。UTCP が関わるまでの 12 年間は、同志社大学の名誉教授である北垣宗治先生が、ほとんどボランティアで続けてこられた。IPO は、一つの国から 2 名まで選手が出場可能で (主催国は 10 名まで出せる)、現在 40 か国前後の国が参加している。引率者も国あたり 2 人までで、全員が審査に当たる。哲学の研究者はあまりおらず、高校の先生が多い。エッセイコンテストは、存在論、認識論、倫理、美学等、様々なジャンルの哲学・思想のテキストから、数行~十数行程度の一節が引かれ、そのうち一つを選んで、それについて自由に問いを立て、エッセイを書くというもの。使用言語は母語以外の英独仏西のいずれかで、ほとんどの高校生が英語で書くわけだが、競技時間は 4 時間、それを引率者が審査をして、メダリストが決まる。このような哲学オリンピックの「選手養成」のために、まず私が提案したのが「合宿」である。そこで私がしようと思ったのは、エッセイを書くための「思考の方法」を教えることである。

かくして 2012 年の 8 月 22 日と 23 日、二日にわたって「高校生のための哲学サマーキャンプ」を開催した。一日目は、まずオリンピックと同様の形式で、4 種類の異なるジャンルの哲学書の一節から一つ選び、それに関連してエッセイを書くという課題をやらしてもらった (本番では英語だが、ここでは日本語で)。それで書いたものをチューター役の大学院生の助けを借りて分析し、問い、定義、根拠、事例、結論などの要素を見つけ出し、その順番、構成、余分なもの、足りないものがないか考えてもらう。

そのあと今度は、分析によって抽出・補完した諸々の要素を取捨選択してエッセイを再構成し、それを発表する。こうして高校生たちは、自分がいつも通りに

書いた時と、明確な方法をもって書いた時の違いを、身をもって体験する。それはたんに文章がよくなったというレベルの話ではない。普通に書いていたら考えもしなかったことを考え、より緻密で筋道立てて考えるということ、そしてその上で文章を書くという初めての経験である。

二日目は、同様のことを別の課題文を使って、3~4人のグループでやってもらった。複数の人の意見・視点が入ることにより、一人で考えるよりも議論に幅が出てくる。他方で、議論をまとめるのが難しくなる。自分とは異なる考えに耳を傾け、自分を開き、受け止める。そうすると議論は時に紛糾し、方向を見失う。それでも、一日目にやったように、問い、定義、根拠、事例、結論といった議論のパーツを見つけ、それを組み立てていく。その後、グループごとにプレゼンをして、ディスカッションをする。その時も議論の要素に着目して、互いに質問をし、答えていく。

もちろんこうしたプロセスがわずか2日でうまくできるようになるわけではない。しかし、高校生たちは、考える時、書く時にどういうことが必要なのか、何に注意すればいいのかを知る。そして自分たちが今までいかに考えていなかったか、いかに安易に書いていたかを知る。あとで出してもらったアンケートでは、キャンプでやったことが、初めての特別な体験であったこと、自分で、みんなで経験した思考と議論の深みのことがつづられていた。

このキャンプの二日間は、私たち UTCP のスタッフ、チューターとして協力してくれた院生たちにとっても、感動と興奮に満ちていた。キャンプに先立って、院生たちにチューターのトレーニングとして、「思考の方法」を教えていた。それは彼ら自身が初めて学ぶものであり、高校生でも十分学ぶことができる。そしてその場にいることで、院生自身も思考を刺激され、深められた。最初の年は手探りの部分もあったし、終わってみて改善点もたくさん出てきた。だが、この方向に進んでいけば、着実な成果を出していける、そこからいろんなものを生み出していける——合宿を通じてそういう自信と確信を得ることができたのは、最大の収穫であった。

## P4C のインパクト

P4E プロジェクトの直接の機縁となった P4C は、当初「思考の方法」を教えるキャンプとは別であった。キャンプに先立って、私は中島さんとハワイ大学と共同で哲学のセミナーしにハワイへ行っていた。キャンプはそれ以前から計画していたことだが、P4C との出会いは、そうではなかった。上廣倫理財団は、ハワイの P4C も支援しており、私が渡航する前に、機会があったら P4C を見てくるといいと言っていた。だから、私としては、それは共同セミナーのついでに行

く、という程度の位置づけだった。P4C そのものについても、それほど深く理解していたわけではなく、日本で土屋陽介さんが「子どものための哲学教育研究所」に書いたコラムや、そこでアップしている論文などの資料を読んでいただけだった。たしかに IPO への協力、哲学サマーキャンプの企画は、本気で考えていたし、哲学教育一般にも強い思いがあった。しかしそれは、P4C とは明確に結びついてはいなかった。楽しみにはしていたが、「とりあえず、長期的には関わってくることもあるだろうから、見ておいて損はないだろう」くらいの気持ちだった。

言い訳をさせてもらえば、実際に見学する前なら、これ以上のことは望めなかったと思う。そもそも私は、共同セミナーで人生初の英語の授業をすることになっていて、精神的にはそれだけで一杯になっていた。それに、土屋さんのコラムを読んで、面白そうだと思っただけでは、それだけではまったく不十分だった。とはいえ、その不足は、おそらく、知識や理解の“量”ではなく、“質”に関わることであり、実際に自分が P4C を体験しなければ分からなかったのである。

財団の計らいで、サマーセミナーの期間中、ハワイ大のホスト役ロジャー・エイムズ氏の自宅で、関係者を集めてパーティーが催された。そこで私は、ハワイの P4C センター (Uehiro Academy) の所長トーマス・ジャクソン氏と知り合うことができた。私たちは、たくさんの人でごった返す家の中で、目があった瞬間にお互いが誰か悟った。そして、哲学教育について語り合い、すぐに意気投合した。そして、後日授業を見学させてもらうことになったのである。

最初にカイルア高校に行ったのだが、そこで実際に見たのは、私が前もって知識として仕入れていた通りのものだった。土屋さんのコラムも読んだ。見学に行くことになって、前もって渡されていたジャクソン氏の概説も読んだ。だから、そこでどんなことが行われるのかは、おおむね分かっていた。それでも実際に見て自分も参加して体験したインパクトは、想像を超えていた。私は「自分一人だけで見てはいけない！ 学生にも見せなければ！」と強く思い、翌日ホノルル小学校に行く時、いちばん興味をもっていた院生を一人、セミナーを休ませて連れて行くことにした。その時私は彼女に「今日で人生が変わるかもしれないから、気をつけたほうがいいよ」と“忠告”した。それはたぶん（いや、間違いなく）私自身の人生がすでにその時点で変わっていたからだろう（ちなみにこの大学院生とは、本書でも執筆している神戸和佳子さんである）。

P4C はきっとものすごいポテンシャルをもっている。相手や状況に合わせてアレンジすれば、いろんな形で使えて、いろんな効果が期待できる——そういう確信が私の中に芽生えた。ハワイから帰国直後の二日間の哲学サマーキャンプで、さっそく私は何か試してみたかった。そこでハワイで見学に連れて行った院生

に、夕食後の高校生とのフリーディスカッションを任せた。彼女は私の意を汲んで、P4Cスタイルでやってくれた。そして予想通り、それは高校生にとってばかりでなく、東大の院生にとっても、稀有で豊かな時間となっていた。

やっぱりそうだ、これは行ける。いろんなことができる。一緒にやれる人たちもいる！——キャンプには、ワークショップで呼んだ河野哲也さんと土屋陽介さんも来てくれた。そのあと間もなく彼らと再び会って打ち合わせをして、哲学対話のワークショップを企画した。そうした勢いの中で、「Philosophy for Everyone (哲学をすべての人に)」というタイトルは、ほとんど自然発生的に出てきたのだった。

### もう一つのP4C

Philosophy for Everyone を構想するのに、大きなきっかけになった出会いがもう一つある。前回述べたように、ハワイのエイムズ邸で開かれたパーティーに、日本で道徳教育に携わっている先生の一行がいた。彼らは、上廣倫理財団が行っている日本とハワイの教員交流事業で、P4Cの見学に来たとのことだった。そのコーディネーター役として、ワークショップでも講演していただいた兵庫県立大学の豊田光世さんもおられた（その後東工大を経て現在は新潟大学に勤務）。後で知ったのだが、実は彼女こそ、日本にハワイのP4Cを紹介し、上廣倫理財団と結びつけた人物である。

パーティーで豊田さんとそれほど多く喋ったわけではなかったが、彼女の話はとても印象的だった。どんなことをしているのか聞いたところ、佐渡島でトキを自然に戻す活動をしており、そのためにP4Cの手法を用いてコミュニティ作りをしているという。そして彼女は静かな口調でこう言った——「私にとってP4Cというのは、Philosophy for Communityでもあるんです。」

コミュニティのための哲学。子供や教育のためだけではない、共同体のための哲学、社会のための哲学……結局P4Cは、子供のみならず大人も含め、社会の様々なところで活かせる対話の方法なのだ。彼女の言葉で私は視界が一気に開けたように感じた。

ただ彼女と話をした時は、私自身まだP4Cは未体験だったし、豊田さんの活動も詳しく知らなかった。だから彼女の話聞いても、本当のところはよく分かっていなかった。その真意と真価について、具体的なイメージをもったのは、後に豊田さんが送って下さったP4Cと佐渡の活動についての論文を読んだ時だった——この人は、P4Cの最前線にいて、そのポテンシャルをもっともよく見せてくれる人だ。何としてでももう一度会って、詳しく話を聞きたい！ということで、豊田さんにもワークショップに来ていただいたわけである。

実際に話を聞いて、その大変さも、大切さも、意義も成果も、想像以上だった。何十回にもわたる地元の人との対話、それも、哲学カフェや今回のワークショップのように、希望する人たち相手ではなく、むしろ乗り気ではない、あるいは、拒絶する人たちとの対話。コミュニティのための哲学でありながら、下手をすれば、利害が衝突したり、お互い腹の中に隠していた嫌な本音が露呈し、コミュニティを崩壊させてしまうかもしれない……豊田さんは、そんな緊張感の中、一回一回、文字通り真剣勝負の対話を何年も、根気よく続けてこられた。それはほとんど戦いと言ってもいいほどだ。それでも彼女は、きっといつも静かに、細やかな思いやりと折れることのない志をもって続けてこられたのだと思う。

そうして豊田さんを言わば触媒にして、その時々対話の場に互いに敬意をもって率直に語りうる「安心感 (safety)」が生まれる。やがて人々が変わり、コミュニティがまとまり、動き出す。それまでただ国や“有識者”の出来合いのプランを受け入れるか拒絶するかしかなかった人たちが、自らのイニシアティヴを発揮し、コミュニティとその未来のために行動するようになる。対話の力とはこういうものか、と感銘を覚えた。

豊田さんの挑戦は、日本全体の今後あるべきコミュニティ作りにとって、強力な武器になりうる可能性を秘めているような気がした。と同時に、彼女のような稀有な人が、いったい何人、何年奮闘しないといけないのかと思うと、気が遠くなる。それでも、こうした対話のメソッドを実践していくことは、日本を少しずつでも、大きく変えていく力をもっているにちがいない。そうして原発に象徴されるような国家の横暴から、人々が初めて本当の意味での主権を獲得し、共同体を作っていけるのではないか——私は彼女の話聞きながら、そんな壮大な希望に思いを巡らせた。本当に Children から Community までカバーできれば、哲学はきっと、まさしく「すべての人」のものとなるのだ。

## Project 「研究・教育の一般的方法としての哲学的思考」

すでに述べたように、UTCP の哲学教育への関わりは、IPO (国際哲学オリンピック) と P4C (子供のための哲学) を軸にしているが、この二つはかなり性格が違う。P4C のほうは、哲学カフェや小中高 (ないしその年代の子どもたち) で行われる対話、もしくはそれに基づく教育である。そこでは、必ずしも議論の緻密さや論理性が重要なわけではなく、また時間的な制約も厳密ではなく、特定の結論に至る必要もない。他方、IPO はエッセイコンテストなので、一定の時間内に論理的な一貫性と結論のある議論を組み立てなければならない。やはりある種のアスリートを育成するような感じに近い。しかも練習の時はともかく、最終的には一人でやらなければならない、孤独な戦いになる。



夏に行った高校生のための哲学キャンプではその両方の要素を取り入れたが、もともとこのキャンプはIPOの準備という意味合いがあるので、中心になるのは、問いと主張があって論理的に一貫した議論を組み立てることであった。ただし、ここで高校生を指導するにあたって必要なのは、彼らの書く内容を訂正したり、模範解答を示すことではない。そんなことをしても、本番では役に立たないし、自分で文章を書けるようにはならない。重要なのは、彼ら自身が問い、考えを整理し、筋道立てて書けるように手助けすること、そのための方法を教えることである。前に書いたように、彼らの書いたものを要素に分解したり、議論に必要なパーツを見つけさせるようにしたのは、そのような意図からだった。

しかし、そもそもこのような「方法」はどういうものなのか。私自身は、就活の書類作りやゼミのレポート指導でそのようなことをやってきたが、そこでは何度もやり直しをさせる時間もあるし、その場その場で臨機応変に対応できる。それに、哲学の問題を考えさせていたわけでもない。また、私が自分の論文を書く時には、そういう方法をそれなりに意識的に使ってきたが、そこには何となく分かっているだけの「暗黙知」も多い。

キャンプで私が参加するすべての高校生の相手をするにはできない。そこで私は、大学院生をチューターとして養成し、キャンプで高校生の思考の手助けをしてもらうことにした。そのために必要なのは、院生に「問いと思考の方法」を教え、それを実地に訓練することである。それは彼ら自身が知らないことであり、これを身につければ、彼ら自身の研究、論文の執筆にも役立つはずだ。

また、よく言うように、私たちは、教えることによって学ぶ。だから大学院生がチューターとして高校生をサポートできるようになれば、それは彼ら自身の研究、論文の執筆にも役立つはずだ——そういう意図から、私は「研究・教育の一般的方法としての哲学的思考」という堅苦しい名前のプロジェクトを立ち上げ、そこで私がつも「暗黙知」を意識化し、より具体的なマニュアルを作ることにした。それと並行して、哲学対話の方法の研究、ファシリテーターの練習もやるようになった。こうして、P4Eプロジェクトの一步手前まで来たのである。

## 哲学をすべての人に

ひと昔前まで、哲学はただ難しいだけで、何の役に立つのか分からないというイメージが強かった。実際、大学で行われていた教養としての哲学の講義は、その“期待”を裏切らないものだった。それに対して、当の哲学者たちは「役に立たないから価値があるんだ」と聞き直っていた。もちろん、言わんとしていたのは、好意的に解釈するなら、「哲学は実用品ではない」、功利主義的な意味で役に立つものではない、ということだ。「教養」じたいがそういう性格をもっている

わけだから、教養の最たるものとしての哲学も役に立たなくて当然。それが哲学の矜持でもあったろう。とはいえそれは、どんな役立たずの哲学研究でもいいという、隠れ蓑になっていた面がある。

しかし、いつの頃からか、哲学を取り巻く状況は変わった。環境問題や医療問題が様々な形で噴出してきて、科学や技術だけでは解決できない、とりわけ倫理的な問題を提起した。それに呼応するように、環境倫理や生命倫理のような応用倫理学が登場し、脚光を浴びるようになった。そして哲学は実践的でなくてはならない！と主張されるようになった。

おそらくその背景には、国家の財政難や少子化や国際化で、大学が競争にさらされるようになり、大学が国公立も含めて、経済的な効率（学部学科ごとの学生数、就職率）を重視せざるをえなくなったこと、そして個人としても大学としても外部資金を獲得するよう駆り立てられるようになったことが絡んでいる。つまり、哲学といえども、社会の需要に応じなければ存続できなくなってきたのだ。さもないと、研究費は削られ、ポストは減らされ、就職も難しくなる、というプレッシャーがかかっていった。そしてかつてだったらむしろ敬遠されたような実用性＝「社会に直接役に立つ」ことを求められたし、多くの哲学者が背に腹は代えられないと、その方向へシフトした。

「役に立たないから価値がある」とする哲学は、一時的な現象だったのかもしれない。国家が経済成長し、大学に経済効率を求めず予算を割り当て、「学問の自由」を保証し、子供の数が増え、大学の数と定員が増え、ポストが増え……といった好循環のおかげで、役立たずの哲学研究をしても就職できた。それは哲学にとって、幸運なことだっただろう。けれども、それはあくまで時代状況に支えられてのことだ。そういう「古き良き時代」が過ぎ去ってしまい、とにもかくにも哲学は応用倫理として、世のため人のためにアピールするようになった。

たしかに倫理的な問題は広く社会で共有されるものであり、それによって哲学は多くの人の関心を引くようになった。だが、結局そこでも哲学は高度に専門的であり、しかもそれは応用倫理学である以上、哲学をしたければ、まずは基礎となる古典を学び、そのうえで応用すべきだ、という理屈になる。哲学はやはり哲学者のものであり、哲学者はあくまでプロフェSSIONナルであり続け、一般の人がもっていない知識をもっていることが存在意義だった。だから応用倫理でもなお、哲学はすべての人のものではなく、一般の人は、いわば観客にすぎなかった。

それでも応用倫理は、哲学が一般の人には縁遠い、訳の分からないものなのだというイメージを変え、哲学への興味を広く喚起した。そしておそらくそのころからであろうが、哲学をやさしく解説する本や、一般向けの入門書が出版されるようになった。だがここでもなお多くの人は、哲学という営みにおいて受動的な

位置にある。彼らは哲学的な知識や思考を受信し、消費するのであって、発信し、生産するのはやはり哲学者であった。

哲学をすべての人に開かれたものにするためには、誰もが哲学を発信し、生産できるようにならなければいけない。それが対話の実践である。哲学カフェやP4Cは、まさにそのような場である。そこには専門家も素人もない。大人も子供もない。それは、専門的に見れば、大した独創性はないだろう。哲学研究者のなかには、実際それを「たんなる素人の井戸端会議」のように批判する人も多い。しかしどのような人であろうと、対話をする人たち、その場にいる人たちみんなにとって、そこで生まれる思考は、その時その時で一回的であり、その意味でそのつど新しく、オリジナルなのである。それに彼らは研究者ではない。学問的なオリジナリティもクオリティも必要ない。むしろ一人一人が自ら思考を広げ、深めること、その個人的な体験の質が重要なのだ。

このような共同の思索としての対話は、古代ギリシャ以来、そもそも哲学の原点ではなかったか。哲学はこの原点に戻ることによって、すべての人のものになりうるのだ。かつて哲学的な対話をしうるのは、ごく限られた人だけであった。しかし今日であれば、もっと広く開かれたものにできる。したがって課題は、そうした対話の場をどこでどのような形で生み出していくかである。P4Eの存在意義も成否もそこにかかっている。

